

中島 巖先生をお送りする

杉 谷 眞佐子

中島巖先生は、昭和43年関西大学文学部教育学科に専任講師として赴任、助教授を経て昭和52年以来文学部教授として教育心理学を担当してこられ、平成12年4月外国語教育研究機構の発足と同時に移籍された。その間、学部や大学院での教育・研究、そして学内業務に多大な貢献をされてこられた。

中島先生のご専門は発達心理学、言語心理学であるが、その先生が外国語教育研究機構へ移籍されたことに對し不思議に思う声もあったと聞く。因みに「言語心理学」はKarl Bühlerにより基礎を築かれたが、ドイツでは通常 „Sprachpsychologie“ と称され、言語学に基礎を置く「心理言語学」(Psycholinguistik) と區別される（尚英語では両者に対し “psycholinguistics” という呼称が用いられることが多い）。

人間の言語運用を研究するのに言語体系からではなく、社会的に行動する人間の心理過程から分析・研究し、その知見を外国語運用能力育成に応用しようとするアプローチは、言語運用を「言語記号の音声化」としてではなく、包括的なコミュニケーション行動として捉え「外国語教育研究」がいち早く成立した欧米では、共通の認識となっている。そのような研究と教育を、中島先生は、外国語教育研究機構が成立する以前から、文学研究科の教育心理学専攻の講義で論じられていた。またドイツの言語心理学の権威、テオ・ヘルマン教授（マンハイム大学）を迎え、大阪ゲーテ・インスティトゥートで開催されたドイツ語教授法の研究会にも参加され、ドイツ語教育関係者と交流されていた。

その後文学研究科内に新しく「外国語教育専攻」が増設される際、既存の「xx語学」の応用領域としてではなく、学際的な領域として確立しようとする構想において、先生のご専門領域は大変魅力的であり、かつ重要であった。また新専攻で指導を受けた学生の一人は、現在、ドイツのシュタイナー学校の教員養成機関で、数少ないアジア系学生の一人

として「外国語としてのドイツ語」の教員資格を得るべく健闘している。

中島先生の指示表現の使用に関する実証的な研究は日独の比較文化的観点から大変興味深く、ヘルマン教授の著書にも引用されている。他にも、学習者の言語音声情報処理の心理的過程に関する諸論文は、科学的基盤に基づき運用力育成を検討する際、多くの示唆を与えている。

学内業務では数々の要職をこなされたが、中でも阪神大震災時の学生部長として、或いは国際交流センター長として活躍されている。センター長としては、ヨーロッパでも名門のゲッティンゲン大学との交流協定締結にあたられ、その後夏期講習会へ20名の本学学生派遣枠を実現された。同大学の中島先生への信頼が、速い交渉の進展に大きな役割を果たしたことは想像に難くない。平成16年夏、延べ100名の関大生を引率された夏期講習会の修了式典で、教授に感謝の記念メダルが授与されている。中島先生のご努力に対するゲッティンゲン大学の高い評価が窺われる。

中島先生は終戦間近、小学校4年生でお父様を亡くされ、その後お母様と二人の生活で大変な苦学を続けられたそうである。中学卒業時就職すべきところ、県の児童福祉奨学生として昼間働きながら夜間高校へ通う道が開かれるが、体調を壊され全日制へ転じられた。高校卒業時は日本育英会の特別奨学生として神戸大学・教育学部に進学し教員を目指すことになる。大学時代、片道3時間の列車通学の傍ら、学資を得るため家庭教師も続けられた。大学卒業に際し再び予想外の進路が開け、指導教授の強い勧めで大阪大学大学院へ、日本育英会の奨学生として進学された。お母様は「神戸友の家」(羽仁もと子の愛読者会の会館)に管理人として住み込むことになる。大学院修了後は研究者としての道を進むことが可能になり、マルガレーテ・澤田氏、故前田嘉明教授、故森昭教授との出会いからドイツ語の世界へも入られ、共同研究者でもある言語心理学のヘルマン教授と出会われる。因みに同教授もミュンヘンのゲーテ・インスティトゥート本部での教授法の国際セミナーに招待されている。

このように文学部そして外国語教育研究機構と、学問的にも制度的にも変革の過程を体験された先生は37年を経て今大学を去られる。今後は日独間を往来し研究を続けられるという。より深い相互理解の架け橋となられることをお祈り申し上げたい。